

修士論文概要

南アフリカ共和国ホームランドにおける環境保全型農業プロジェクト 参与観察による参加型アプローチの問題点の整理

高橋 恭恵 (202D0149)

研究の目的と方法

筆者は、南アフリカ共和国東ケープ州カラ地区に在住し、本論文で研究する「地域自立をめざす持続的農業（2003年以降は環境保全型農業）プロジェクト」に調整員として従事している。2003年2月から2006年3月の現在まで、カラ地区に3年間駐在するうちに、プロジェクトは何度も困難に直面し、さまざまな局面で筆者は問題意識を持ってきた。

第一に、南アフリカという国が抱える貧困への疑問である。なぜ、1995年の民主化にもかかわらず、「旧ホームランド農村地域=貧困地域」という状況が現在も続いているのだろうか。アフリカ諸国に限らず、世界各地において、19～20世紀にかけての帝国主義支配の足跡を、いまだに見つけることができる。筆者は、アフリカで農村開発にたずさわる一個人として、その足跡が残る現代の世界に対しての疑問を持ち続けている。現在の南アフリカ政府が経済成長強化路線を内外に示すなかで、白人層、裕福な黒人層、貧困な黒人層の格差は縮まらず、旧ホームランドは依然として鉱山労働者あるいは白人農場労働者の「供給地（リザーブ）」的な役割を甘受している。農村での伝統的な生活は軽視され、学校で畑作業を「懲罰」として受け入れてきた若者たちの農村離れは、農村部住民の深刻な問題である。

第二に、開発に従事する外部者としての疑問である。上記のような南アフリカの現状に対応するために開始されたプロジェクトが「うまくいかない」ことについて、プロジェクト専従者の一人として筆者は大きな問題意識をもっている。農村開発という社会分野において、当事者である農民の開発を尊重しながら、かつプロジェクトの期限以内にドナーや支援者に対する説明責任を果たすことには、多くの工夫と苦勞が伴う。多角的な対応力と予測力を必要とする職務に従事する中で、プロジェクトが「うまくいかない」原因は何なのか、分析、対応する必要に迫られている。現在に至るまで、問題を分析、対応してこなかったことを深く反省するとともに、筆者自身が属する援助する側の、上位者としての対応に、大きな疑問を感じている。外部者はプロジェクト失敗を内部化せず、そのため、経験が蓄積されないままに同じ失敗を繰り返している印象が強い。計画通りに実施できない原因は何か、そして、文化の違う外部者として事前に何をどこまで「計画」できるのか。計画と現状のギャップは、筆者が抱えるもっとも大きな問題意識である。

以上で述べた 2 つの疑問から、本論文の目的は明白である。プロジェクトの真の成果は、参加型農村開発プロジェクトとして、当事者の生活環境が改善されることに他ならない。本プロジェクトが、貧困問題の一つの解決策として効果を発揮するように、そして、農民の生活環境の改善に貢献するために、支援する側として、外部者側の修正すべき点の指摘を試みる。そして、本論文によって、開発に携わる外部者のアプローチの見直しを図り、今後の活動の提言をおこなう。

本論文において分析の根拠となるのは、筆者が 2003 年のカラ地区への赴任から現在に至るまでの、現場からの観察をまとめた参与観察記録である。現場で、外部者と農民との中間に位置する者として、プロジェクトの経過を率直に綴った記録は、プロジェクトへの提言のための視点となりうると確信している。参与観察記録を組織形成、規範教育、資源供与の 3 つの枠組みに分類し、この枠組みによって問題点を整理し、理論分析をおこなう。

論文の構成

第 1 章 序論

1-1 研究の目的と方法

1-2 論文の構成

第 2 章 プロジェクト対象地域：カラ地区

2-1 カラ地区の概要

2-2 プロジェクト対象 9 ヶ村の概要

第 3 章 プロジェクトの概要

3-1 プロジェクトの背景と目的

3-2 プロジェクトの内容

3-3 プロジェクトの関与者と実施体制

第 4 章 参与観察記録

4-1 記録作成の視点

4-2 参与観察記録：2003 年 6 月～2004 年 5 月

4-3 参与観察記録：2004 年 6 月～2005 年 5 月

4-4 参与観察記録：2005 年 6 月～2005 年 12 月

第 5 章 観察から得られた知見及び考察

5-1 組織形成に関する問題点

5-2 規範教育における問題点

5-3 資源供与に関する問題点

第6章 結論

6-1 計画者の期待

6-2 計画者の能力

6-3 提言

むすび（謝辞）

参考文献

論文の概要

本論文は全6章から構成される。

第1章は序章である。農村開発プロジェクトに従事する筆者が、南アフリカでの活動の中で感じた問題点と、研究の方法を明らかにする。また、各章の要約をもって本論文の構成を示す。

第2章では、事業対象地域であるカラ地区について概観する。悪名高い南アフリカの人種隔離（アパルトヘイト）政策において、旧ホームランド・トランスカイ、黒人居住地区である農村部の歴史的な位置づけと文化、社会、生活環境、および、カラ地区を含む東ケープ州サキシズウェ行政市の行政機構について言及する。同様に、プロジェクト対象村であるカラ地区の9ヶ村の概要についても述べる。

第3章では、筆者が従事している、環境保全型農業プロジェクトについて概説する。プロジェクトの背景、目的、実施体制を振り返り、プロジェクト計画時に外部者が意図していたことを追及する。また、本章では、プロジェクトの活動を組織形成、規範教育、資源供与の3つの枠組みに分類し、さらに、これらをプロジェクトの3つの事業目的にそって分類する。これによって得られた9つの枠組みは、第4章で展開する参与観察記録の分析の際に適用するものである。

第4章では、筆者が現地に駐在するなかで作成した、プロジェクトの参与観察の記録を展開する。この約90ページにも及ぶ参与観察記録は、3年間に及ぶ日々の記録である。これは、筆者がプロジェクトの現場での活動に対する見解を書き溜めたものであり、活動の経過、活動中に感じた疑問や発見などについて記されたものである。ここでは、事業対象である農村部に駐在している筆者自身を、外部者と当事者の中間の視点を持つものとして位置づけている。このような中立な立場から、筆者が3年間に渡って率直につづった記録は、第

5章で展開される活動分析の根拠となるものである。

第5章では、第4章の参与観察記録を考察する。第3章で提供した、プロジェクト活動の9つの枠組みを用いて、参与観察記録を個々の活動事例ごとに引用し、それぞれの問題点について分析する。これによって、筆者が参与観察記録で繰り返し指摘してきた疑問や発見を明確にし、そこに共通する問題点を見出すものである。

第6章は結論である。第5章の分析から抽出された問題点について総括し、これによって得られた学びを活動への提言とするものである。最も重要な問題点として、筆者はプロジェクトの計画者と当事者の間に生じているギャップを指摘する。そして、本プロジェクトが参加型開発プロジェクトと銘打たれているにもかかわらず、計画者の期待と当事者の能力、あるいは、当事者の期待と計画者の能力の双方において、大きなギャップが生じた理由を考察する。本章で筆者は、「価値規範」「活動の枠組み」「仮説」「財務的な視点」をキーワードとしてこの問題を解明するものである。筆者が南アフリカでの経験の中で得た反省と、そこから得られた4つのキーワードに基づき、筆者は社会問題の解決に関わるプロジェクトの運営についての提言を、本論分を通して行うものである。